

アイヌ生活文化再現マニュアル

クチャ

【仮小屋】

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

発刊にあたって

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構は、平成9年7月の創設以来、アイヌ文化の振興、アイヌの伝統やアイヌ文化に関する知識の普及と啓発、アイヌ文化等に関する研究の推進や助成などの各種事業を実施しております。

そうした事業の一環である「アイヌ生活文化再現マニュアル作成事業」は、アイヌの伝統文化を、映像や音声、文字などによって記録し、アイヌの人々をはじめとして、広く一般の人々や研究者の利用に供することにより、アイヌ文化の伝承・保存を図ることを目的としています。

本マニュアルがより多くの人々の利用に供され、アイヌ文化の振興が推進されるとともに、我が国の多様な文化の一層の発展が図られれば幸いです。

目 次

クチャ（仮小屋）とは	7
実際に使われていたクチャ	9
岩場を利用した小屋	11
設置場所	11
材料	12
用意しておくもの	13
製作	14
完成	16
使い方	17
フキを利用した小屋	19
設置場所	20
材料	21
製作	24
完成	31
使い方	32
松葉を利用した小屋	37
設置場所	38
材料	38
事前に用意しておくもの	39
製作	40
完成	44
使い方	45

拝み小屋	47
設置場所	48
材料	49
製作	51
完成	60
使い方	61
おわりに	62
参考文献	63

— 凡 例 —

- ・映像編で入れることのできなかつた解説等も記しました。したがって、文言等で映像編と一部異なる個所があります。

クチャ(仮小屋)とは

アイヌの人たちは漁撈や狩猟、採集の際、クチャと呼ばれる仮小屋をつくり、寝泊りしていました。クチャには用途や形状、材料によって、いくつかの種類があります。また、材料はその場で手に入れやすいものを使用するため季節や地域により異なります。

本マニュアルでは、4種類のクチャのつくり方を再現します。

- 岩場を利用した小屋…岩に木を立てかけてつくり、冬の猟で使用します。(写真1、2)
- フキの葉を利用した小屋…片流れと呼ばれるつくりで、夏の川漁で使用します。(写真3、4)
- 松葉を利用した小屋…主に冬の猟で使用するもので、短期滞在用です。(写真6、7)
- 拌み小屋…いちばん家に近い形をしています。春のクマ猟に使用されます。(写真8、9)



岩場を利用した小屋

写真1



写真2



フキの葉を利用した小屋

写真3



写真4

岩場を利用した小屋とフキを利用した小屋は、新ひだか町に住むアイヌ文化伝承者・虎尾末吉^{すえきち}さんが再現します。(写真5)



写真5



松葉を利用した小屋

写真6



写真7



挿み小屋

写真8



写真9

松葉を利用した小屋と挿み小屋は、旭川市に住む川上^{さとる}哲さん、^{てっし}哲司さん親子がつくれます。川上哲さんは幼い頃の経験を基にクチャを再現しています。(写真10、11)



写真10



写真11

実際に使われていたクチャ

このクチャの跡は、かつて虎尾さんの狩猟の師匠であった人里ゲンロクさんが使っていたもので、虎尾さんはゲンロク岩と呼んでいます。大きな岩のくぼみを利用してつくられており、一部土砂で埋まっていますが、火を使った形跡があります。アイヌの人たちは自分たちが狩猟や採集をする場所・イオル（生活圏）にクチャを数箇所つくり、自分の印をつけて所有者がわかるようにしていました。クチャは狩猟や採集の拠点とされ、寝泊まりに利用されます。他の人のクチャを使うときには、事前に許可を得て使い、利用した薪や食料を後で戻しておきました。（写真12、13、14）



写真12



写真13



写真14

虎尾さんがこのクチャの近くを訪れたときには、必ず火の神、森の神、沢の神などに供物を捧げて神々に祈ります。（写真15）



写真15

岩場を利用した小屋

設置場所

岩場を利用した小屋をつくります。このクチャをつくるのに適した場所の条件は3つあります。増水しても浸らない水辺であること。岩のくぼみに人が座れる広さと高さがあること。そして地面が砂地であることです。

このクチャは、岩場にある大きな岩のくぼみを利用してつくります。材料も岩場近くで採取し、採取した木材を岩のくぼみに立てかけてつくります。雪が積もる前までに幾日かけて準備をしておき、冬の猟で利用します。(写真16)



写真16



写真17

くぼみは高さ約1m60cm、奥行き約1m、幅約2mです。(写真17)

材料

●木材

立木や流木、枯れ木など岩場周辺にある木を採取します。

木の種類は問いませんが、枝は払っておきます。(写真18)



写真18

木材は、幹の太さや長さにはこだわらず集めます。これらは屋根材であるとともに燃料となるので、多く集めることにより、燃料のたくわえにもなります。(写真19、20)



立木

写真19



流木

写真20

●葦

葦も岩場近くで採取します。枯れて乾燥した長めのものを鎌で刈り、直径50cmほどの束を用意します。

葦は小屋となる岩陰の下に敷いて使います。

(写真21、22)



写真21



写真22

用意しておくもの

- ・鍋
- ・炉鉤

今回はシカの角を使いました。(写真23)

- ・シラカバの樹皮 (写真23)
- ・たいまつ

事前に準備し、クチャに常備します。(写真23)

- ・トゥキ (杯) (写真24)
- ・トノト (酒)

カムイノミに使用します。(写真24)



写真23



写真24

製作

利用する場所を清めるため、虎尾さんは、予め用意していた塩をまきます。(写真25)



写真25

床をつくります。地面をならして平らにし、石などは除けておきます。岩から2mほどの範囲に寝床と炉をつくります。やや突き出した岩の真下が寝床になります。(写真26)



写真26

葦を岩に寄せて敷き詰め、炉縁として流木を置きます。葦はクッションの役目をし、地面からの冷気を伝えません。(写真27)

葦の上にはシラカバの樹皮を被せます。寝床ができました。流木で仕切られた所で火をおこす炉をつくります。今回は2～3人用のクチャを再現しますが、寝床の大きさは利用する人数により変えても構いません。(写真28)



写真27



写真28

次に、集めた木材を岩に立てかけます。長い木から立てかけていきます。岩の一番突き出た部分から1mほど離れた場所に木の根元を置き、立てかけます。(写真29)



写真29

木材を隙間ができないよう、囲んでいきます。片側は入口になるので、木を立てかけず空けておきます。(写真30、31、図1)

長い木を立てかけた後、短い木を重ねて立てかけます。立てかけた木は屋根材としてだけでなく、薪としても利用するので、多くの木をたてかけておきます。

集めておいた木は雪が積もると埋もれてしまうので必ず立てて置いておきます。(写真32)



写真30

図1 立てかける位置

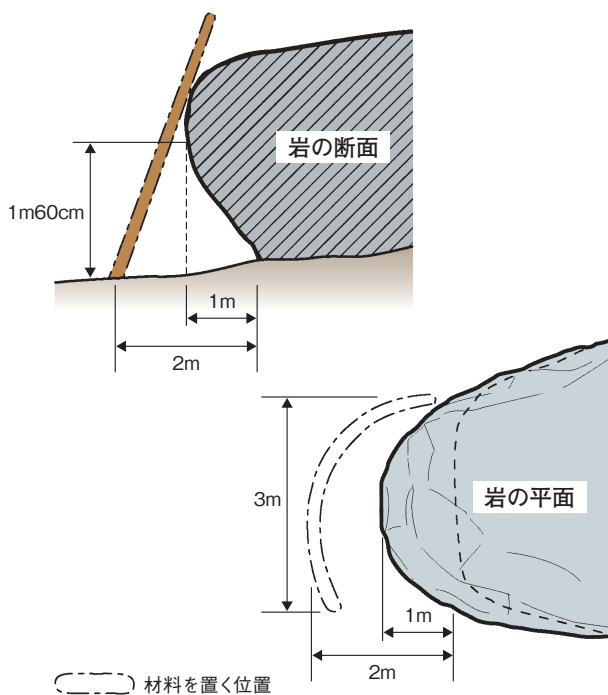


写真31



写真32

完成

クチャができました。今回立てかけた木は長いものや短いものなど60本以上ありますが、かつてクチャを利用していた頃は、何年も使えるようさらに多くの木材をたてかけておいたと言います。(写真33、34、35)



写真33



写真34



写真35

使い方

炉の上の立てかけた木に炉鉤を留め、鍋をかけます。針金や紐、縄等で固定します。(写真36)

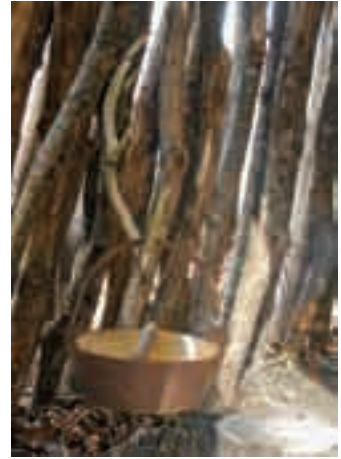


写真36

次に、カムイ（神）に祈りを捧げるためのイナウ^{*}を削ります。(写真37)



写真37

火を起こし、カムイノミ（神への祈り）を始めます。カムイノミはストゥイナウ^{*}1本で行います。「冬まで、このクチャを守ってください、そして猟運に恵まれますように」と、火の神、森の神、大地の神、川の神などにトノトを捧げながら祈ります。(写真38)

祈りの最後にイナウを火の神に捧げます。(写真39)



写真38



写真39

^{*}イナウ、ストゥイナウについてはアイヌ生活文化マニュアル「イオマンテ 熊の霊送り [道具編]」を参照してください。

冬猟の時期は雪が深くなるため、雪の降る前に木材を集めておきます。虎尾さんは今回集めた木材の3倍は集めておいたと言います。立てかけた木は薪にして使い、木材が多ければ一冬越すことができます。雪が深くなると内側から木材を切りとって薪にしました。(写真40、41)

この岩場を利用した小屋は、木材を足していくことで何年も使うことができます。



写真40



写真41

冬になり、雪が積もることで周りが囲まれて隙間が埋められ、暖かく過ごすことができます。上部は雪で囲われないので、煙は木の間を通過して上に抜けていきます。砂地を利用するのは、猟に出るとき、火のついた薪を灰の残る砂に刺しておくことで火種として残り、猟から戻って取り出すと再び火を起こすことができるからです。(写真42、43)



写真42



写真43

フキを利用した小屋

フキの葉を屋根の材料に使ったクチャです。片流れ小屋と呼ばれる、屋根が一方にだけ傾斜するつくりをしています。本マニュアルでは、夏のヤマメ漁で利用したフキ小屋と火棚を再現します。数人で使用する短期間用のクチャで、夏の川漁で使用します。(写真44、45)



写真44



写真45

設置場所

クチャをつくるのに適している場所としては、水の流れや風向を考慮し、漁場に近く、増水しても浸からない小高い所であることです。材料は川の周辺で集めることができる流木などを利用します。(写真46)



写真46

最初に、乾いた流木を集めて火を起こします。この火を起こした場所を基にクチャをつくります。材料はこの場所の周りで採取します。(写真47)



写真47

材料

●カワヤナギ（流木）

- ・直径約10cm×長さ約2.5m
- ・先が二又のもの4本

火棚の材料です。（写真48）



写真48

●ハンノキ

- ・直径4～5cm×長さ1.5m以上
- ・先がまっすぐのもの、二又のもの2種類、
それぞれ10本以上（小枝は掃う）

ハンノキはこの地域で手に入れやすい木で、まっすぐなのが特徴です。クチャの骨組みに使います。（写真49、50）



写真49



写真50

●カワヤナギ（立木）

- ・直径4～5cm
- ・葉をつけたままのもの5～6本

クチャの側面に使います。（写真51）



写真51

●フキ

- ・大量に採取

クチャの屋根に使います。大きいほど、茸くときに枚数が少なくて済みます。フキは夏に手に入りやすい材料なので、主に夏用のクチャに使います。
(写真52)



写真52

フキの取り方

葉のつけ根を握り、そのまま茎を折ります。
(写真53)

葉をいためないように茎を重ねて持ちます。
(写真54、55)



写真53



写真54



写真55

●イタドリ

- ・葉をつけたままの長めのもの
- ・直径50～60cmの束

クチャの骨組み、床に使います。(写真56)



写真56

●シナの樹皮

事前に用意しておきます。

シナの樹皮を撚ったものを使います。

(写真57)



写真57

●カワヤナギの樹皮

紐は現地で調達することもあります。採取してきたカワヤナギの皮をはぎます。節の少ないところは長くはぐことができます。カワヤナギの樹皮は乾くと縮むので、乾燥する前に使います。

(写真58、59)



写真58



写真59

製作

火棚を組み立てます。先が二又の流木を4本使います。二又の部分を絡めて紐や針金で結びます。
(写真60)



写真60

根元側を広げ、火を囲うように置きます。
(写真61)



写真61

火棚の位置が決まったところでクチャを建てます。(写真62)
【クチャの床の大きさ】

幅約 1 m70cm × 奥行約 1 m20cm

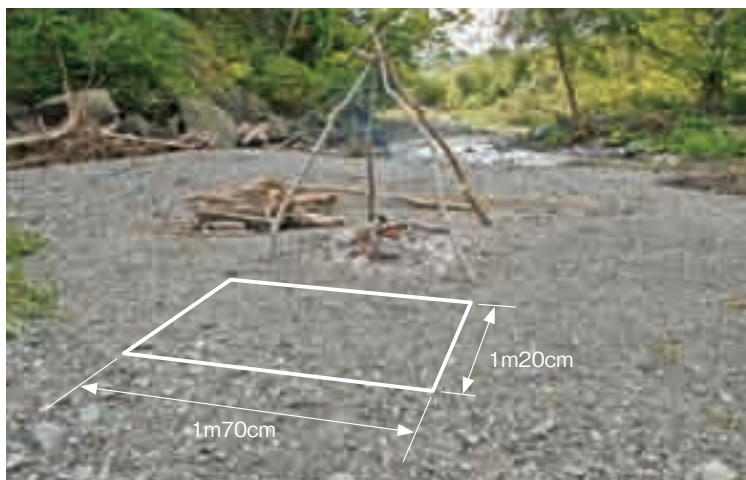


写真62

基本的な骨組みをハンノキで作ります。長さ1m60cmほどのハンノキの二又部分を上にして三角に立てかけます。(写真63)



写真63

二又部分に長さ1m80cmほどの横木を載せて組み合わせ、カワヤナギの樹皮で結びます。カワヤナギの樹皮は、乾くと硬く縮まります。(写真64)



写真64

もう一方の側も同じように組みます。(写真65)



写真65

先ほど組み合わせた二又の部分の外側に一本ずつ木材を加え、丈夫にしました。横木をさらに下と中間に渡し、屋根の中央に縦木を固定します。三角形のこの角度が屋根の勾配になります。(写真66)



写真66

横木を結ぶ紐は、シナの樹皮を使います。シナの樹皮は、乾燥していると切れやすくなるため、湿らせて使います。紐は場所に応じて使い分けます。
(写真67)



写真67

骨組みが完成しました。屋根の部分は縦に4等分するように木を2本加えます。クチャの位置は火棚から程近く、火や魚の焼き具合を調整しやすい場所です。(写真68、69、図2)

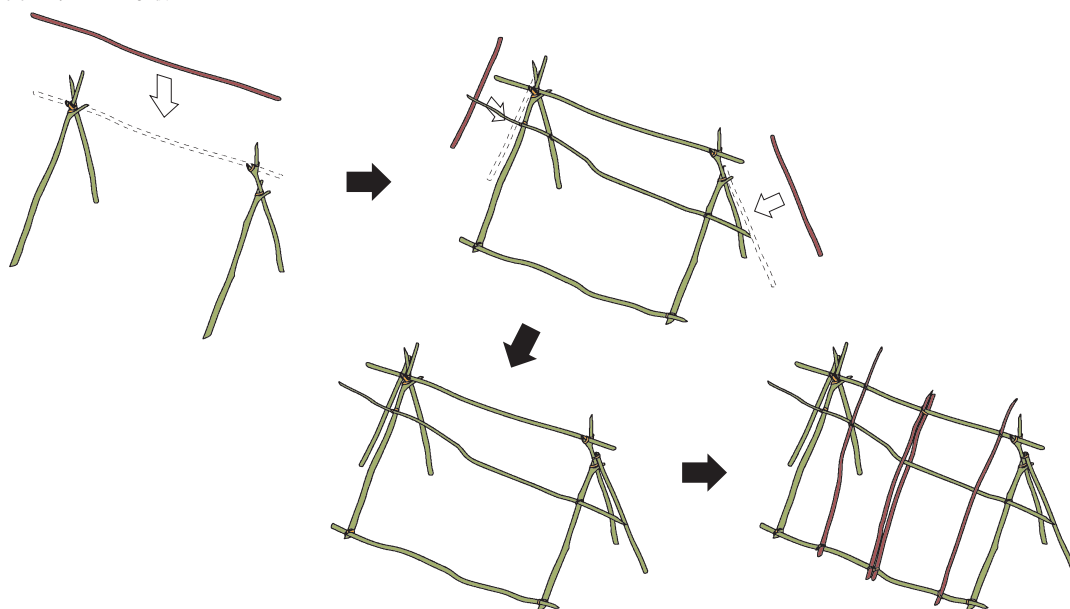


写真68



写真69

図2 組み立て手順



屋根をつくります。

イタドリの茎と葉を分けます。茎は横木として使い、下から留めていきます。茎の長さは1m80cmあります。(写真70、71)



写真70



写真71

シナの樹皮を使って骨組みの縦の棒と結びます。

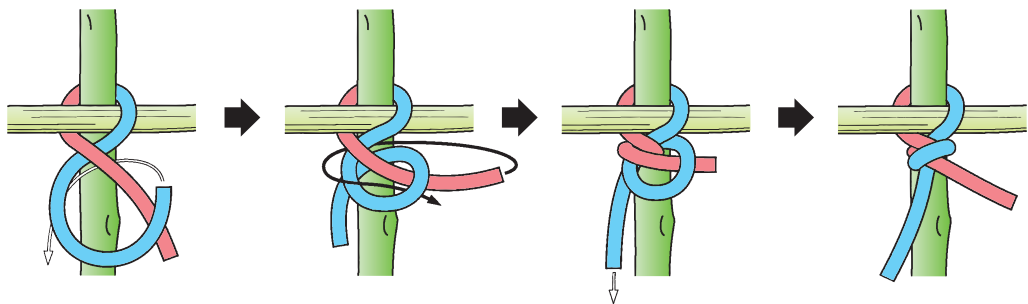
(写真72)



写真72

縦木と横木を固定するときに使われる結び方です。この結び方は、アイヌの住居の屋根や壁の材料を結ぶときにも使われます。このように縛るとほどけてくることはありません。(図3)

図3 結び方



※紐の左右で色を変えています

横木の間隔は手の指を広げた親指と中指の長さ、約18cmです。イタドリは固定した後、屋根の骨組みの幅より数cm長めに切り落とします。

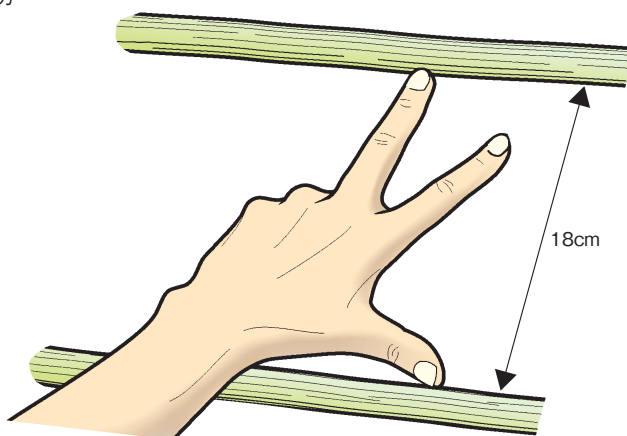
(写真73、図4)

一番上の横木の上に、皮をはいだカワヤナギを一本乗せ、この2本の隙間にフキを差し込みます。



写真73

図4 横木の間隔のとり方



イタドリは段ごとに太い根元側と細い先側を左右入れ替えて留めます。イタドリの横木は6段になりました。(写真74)

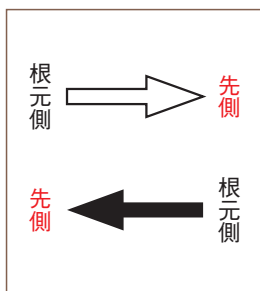


写真74

屋根を葺きます。フキの葉を一番下のイタドリの横木に乗せていきます。葉は表を外側にし、茎を上に出します。(写真75)



写真75

次にイタドリの茎で上から押さえ、フキの葉を上下で挟みます。挟めたイタドリ同士を紐で結びます。(写真76)



写真76

上から押さえるイタドリは、2本使います。先ほど留めたイタドリの切り残しを使い、根元側と先側をそれぞれ左右逆にして上から押さえて留めます。(写真77)



写真77

フキの葉を挟むイタドリの横木は両端と中間の3箇所まで結びます。中間はイタドリと縦木と一緒に結び、作業を下のイタドリの横木から順に上へと進めます。(写真78)



写真78

一番上の段はフキの茎をカワヤナギと横木の間に差し込みます。(写真79)



写真79

屋根ができました。
フキの葉が隙間なく重なっています。葉を下から上へ乗せていくことで、上に重なった葉の外側に雨が伝い流れるため、内側に雨が漏ることはありません。(写真80)



写真80

風除けのため、側面を覆います。カワヤナギの葉のついた枝を適当な大きさに折って、骨組みに引っ掛けます。両側面とも覆います。(写真81)



写真81

床をつくります。前側に流木を置き、イタドリの葉を敷きます。イタドリの葉はやわらかく水分が少ないため、厚く敷くと座っても蒸れたり、濡れたりしません。(写真82)



写真82

完成

フキを使った小屋ができました。

虎尾さんはイチャンコロコニクチャ(ヤマメ^{*}漁用のクチャ)と呼んでいます。(写真83、84)



写真83



写真84

※「ヤマメ」は北海道・東北地方ではヤマベとよぶ所もあります。

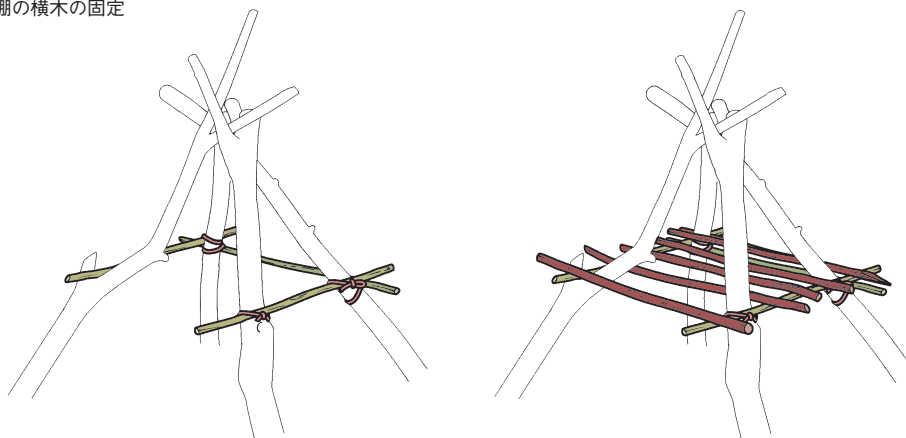
使い方

火棚をつくります。カワヤナギの横木を縛って固定します。一方向を空けておくことで棒がかけやすくなります。棚の高さは約1m50cmです。魚を吊るす棒を4～5本作り、棚に置きます。固定した横木よりも長めにします。(写真85、図5)



写真85

図5 火棚の横木の固定



夜の作業のために、たいまつをつくります。長さ70cmほどの棒の先を尖らせませます。もう一方の先に縦に裂け目を入れ、シラカバの樹皮を挟みます。(写真86)

樹皮は、川原に落ちているものや倒木、立ち木をはいで使います。シラカバの樹皮は燃えやすいので、火を起こすときにも利用します。(写真87)



写真86



写真87

ヤマメ漁では、魚を釣ってからさばいて内臓を取り、串にさして焼きます。何百という魚を焼くのは、夜を徹した作業でした。(写真88)



写真88

魚を棚にかけていぶす前に、鳥などを寄せ付けな
い工夫をします。火棚の先にササの根を乗せます。
(写真89)



写真89

さらに火棚の上に糸を張ります。火棚の四方に石や杭を使ってイタドリの茎を固定します。イ
タドリの茎は火棚を越える高さにします。(写真90)

イタドリの茎の先に糸を結び交差させて張ります。糸は釣り糸や、シナの樹皮でつくった糸を使います。
(写真91)

ササの根を置いたり、糸を張ることで、鳥は羽根に触るのを嫌がり近寄らないと言います。また、夜
はクマが近づかないよう火を絶やさないでおきます。



写真90



写91

焼いた魚を紐で束ね、棒につるして火棚に乗せます。(写真92、93)



写真92



写真93

カワヤナギの葉を火にくべて魚をいぶします。
(写真94、95)



写真94



写真95

フキを利用した小屋は、三晩ぐらいの使用を想定しています。雨露をしのぎ、体を濡らさない程度のもので手早くつくります。よく利用する沢ならば強い風の吹く方向が分かるので、山瀬に背を向けてクチャを立てます。フキの葉は余分にとっておき、重しを置いておきます。屋根の補修や持ってきたものをフキの葉でくるんで濡らさないようにするなど様々な用途に使います。

(写真96)



写真96

このような片流れの小屋は、川漁のほか、山菜採取など様々に利用してきました。屋根を葺く材料はフキ、葦、松の葉など使用目的、季節、地域によって身近に取れるものを使いました。使い終わった後、クチャは炉に被せて焼却します。(写真97)



写真97

松葉を利用した小屋

松葉を利用した小屋は、冬の間山猿などで使用される丸小屋と呼ばれる円錐形のクチャです。冬でも葉の落ちない針葉樹の松の葉を利用し、短期間の滞在に使用します。(写真98、99)



写真98



写真99

設置場所

クチャをつくるのに適した場所としては、綺麗な水があり、増水しても浸からない、雪崩が起きない平らな所であることです。ヒグマの通り道には作りません。(写真100)



写真100

材料

●ヤナギ、シナ、ハンノキ、タモ

- ・枝をはらったもの 直径4～5cm×長さ2m50cm
- ・15～16本

骨組みとなる材料は、山で集めやすい木材を使います。

シラカバは素性が悪いと言われており、折れやすいので適しません。(写真101)



写真101

●トドマツ、エゾマツ

- ・葉の多い枝
- ・大量

屋根や床の材料として使います。今回はこの地域で手に入れやすいトドマツを採取しました。

(写真102、103)



写真102



写真103

事前に用意しておくもの

●シナの樹皮を撚った紐

- ・直径7～8mm (写真104)



写真104

●カツラの樹皮

燃えにくいのが特徴で、炉に使用します。

カツラの木を見つけたときに事前に採っておきます。

(写真105)



写真105

製作

直径2mほどの円形状に雪を踏み固めます。両手を広げて大きさを測ります。入口は川や沢の下流となるようにし、風の向きを考えて決めます。

(写真106)



写真106

クチャの骨組みをつくります。

2m50cmの木材を3本用意し、木の向きを揃えて並べます。(写真107)



写真107

3本の木材の先側にシナの紐を2重に巻きます。木材の間隔をそれぞれ指一本半分開け、余裕をもたせてシナの紐で結びます。(写真108)



写真108

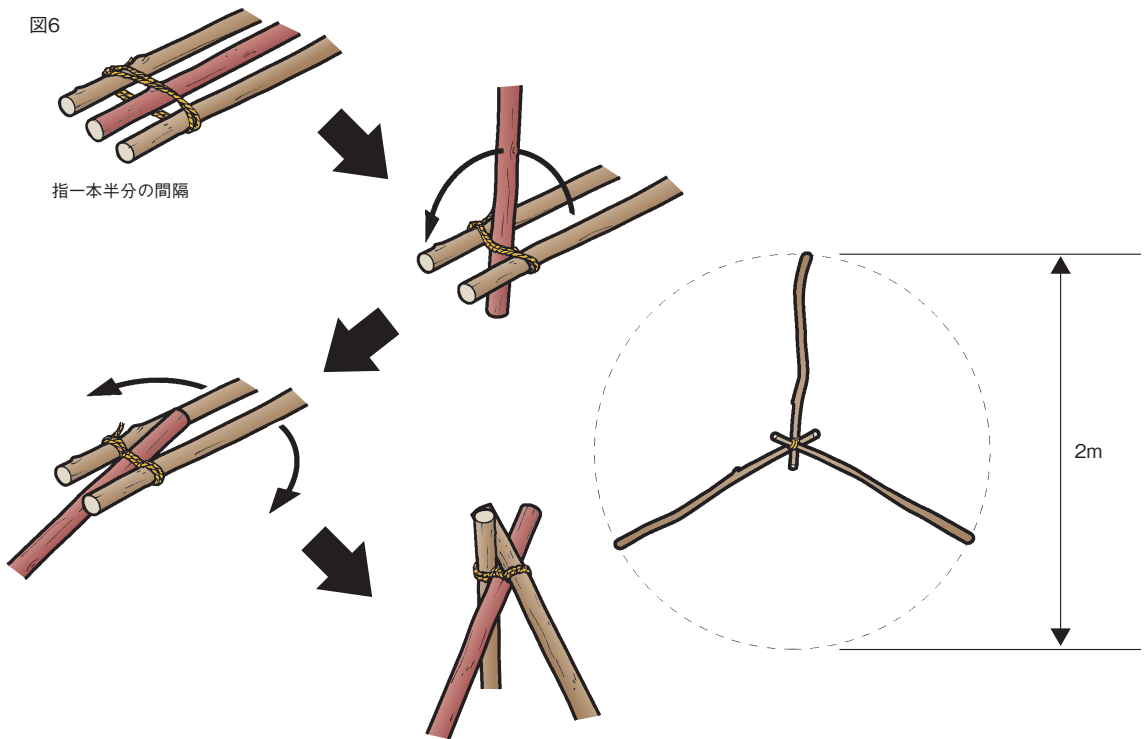
真ん中に置いた木材をシナの紐で結んだところを中心に回転させ、3本の木材を等間隔に広げます。

(写真109、図6)



写真109

図6



それぞれの木材の根元を直径2mの円に合わせて雪に刺します。上部はシナの紐をひねることで縮まり、固定されます。(写真110)



写真110

組んだ3本の間に木材を立てかけていきます。床の面積を考えて根元側を雪に刺し、上部のシナで結んだ部分に先側を立てかけます。入口となる部分には立てかけません。(写真111)



写真111

今回は最初に組んだ3本の他に、合計7本の木材を立てかけました。立てかけた木材の先の部分は結びません。(写真112)

骨組みができました。(写真113)



写真112



写真113

火を使って調理することを考慮して炉鉤をつけます。先が二又になった木材にシナの紐を結び、輪をつくります。(写真114)



写真114

その輪を組みあがった骨組みに引っ掛けます。

炉鉤は入口寄りに取り付けます。炉鉤の長さは約1 m60cmです。炉鉤の下の部分は枝を一部残して、鍋の取っ手が掛けられるようにします。(写真115)



写真115

外側に松葉を葺いていきます。

松の枝は葉のあるほうを下にし、葉の表を内側に向けて被せるように置きます。松葉は枝と葉がお互いに絡んでずれないため、木材に結ぶ必要はありません。(写真116)



写真116

隙間ができないよう松葉を重ねて、下から上へ葺いていきます。(写真117)

入口以外、すべて松葉で覆います。(写真118)



写真117



写真118

床をつくります。松の枝を小さく折って敷き、松葉は葉の表を下に伏せて重ねていきます。雪の冷たさを伝えないように20~30cmの厚さまで敷き詰めます。炉をつくるので、入口の近くには敷きません。

(写真119)

炉鉤の下にカツラの樹皮を敷き、炉をつくります。カツラの樹皮は燃えにくいので、火で雪が解けて炉が沈み込むのを防ぎます。(写真120)



写真119



写真120

完成

クチャの完成です。

松葉で覆った円錐形のクチャです。壁も床も松葉で覆われ、炉があります。松葉を重ねることで風をさえぎり、雪が降っても水滴が室内には落ちてきません。(写真121、122、123)



入口側

写真121



裏側

写真122



内側

写真123

使い方

このクチャの直径は約2mで、大人3～4人が1日程度の滞在を想定したものです。入り口で火を燃やすので、中は暖をとることができます。(写真124、125、126)



写真124



写真125



写真126

製作に時間をかけずに、手早くつくれるクチャがこの松葉を利用したクチャです。小屋はこのまま放置しますが、自然に朽ちて土に還ります。

拌み小屋

拌み小屋は、手を合わせたような屋根の形からその名前がつけられています。春のヒグマ猟で使用されるクチャで、炉や窓があり、屋根中央が開いているのが旭川地域の特徴です。(写真127、128)



入口側（西側）

写真127

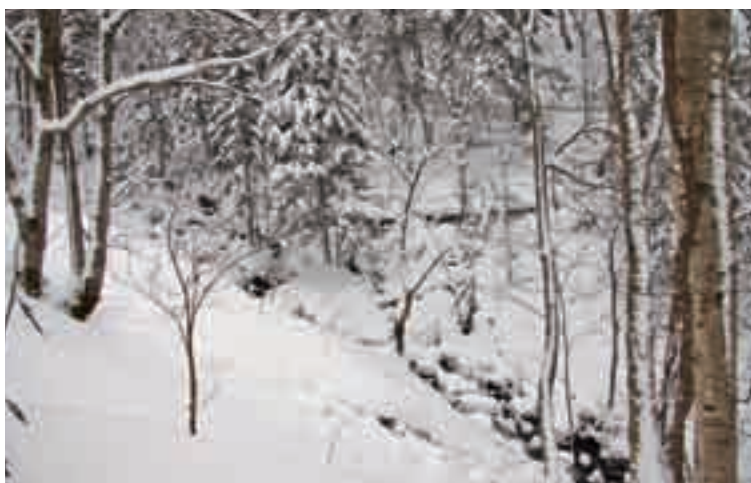


窓側（東側）

写真128

設置場所

クチャをつくるのに適している場所としては、綺麗な川や沢があり、増水しても浸からず、雪崩が起きない平らであることが条件です。ヒグマの通り道には作りません。(写真129、130)



沢が近くにある

写真129



写真130

材料

●ヤナギ、シナ、ハンノキ、タモ

・枝を払ったもの

直径4～5cm×長さ2m 9本

直径4～5cm×長さ2m50cm 12本

骨組みとなる材料は、山で集めやすい木材を使います。シラカバは素性が悪いと言われており、やわらかく折れやすいので適しません。

(写真131、132)



写真131



写真132

●ハンノキ

・直径約15cm×長さ約1m 2本
炉縁として使います。(写真133)



写真133

● トドマツ、エゾマツ

- ・ 葉の多い枝
- ・ 大量

屋根や床の材料として使います。今回はこの地域で手に入れやすいトドマツを採取しました。春は積雪のため松の枝に手が届き、採取し易くなります。(写真134、135、136)



写真134



写真135



写真136

● シナの樹皮を撚った紐

- ・ 直径7～8mm (写真137)



写真137

製作

クチャを立てる場所の約4m四方を踏み固めます。(写真138)



写真138

骨組みをつくります。

2mの木材を2本用意し、その間に2m50cmの木材を1本置きます。3本の木材は向きを揃えて並べます。(写真139)



写真139

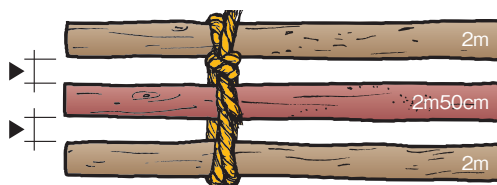
揃えた先側に、シナの紐を2回巻きます。木材の間隔をそれぞれ指一本分から指一本半開けて、余裕をもたせて、シナの紐で結びます。

(写真140、141、図7-1)



写真140

図7-1



▶ 指一本分から一本半の間隔



写真141

真ん中に置いた長い木材を縛ったシナの紐を中心に回転させて反対側に返します。

(写真142、143)



写真142



写真143

三脚ができました。これを4脚つくります。(写真144、145、図7-2)

図7-2

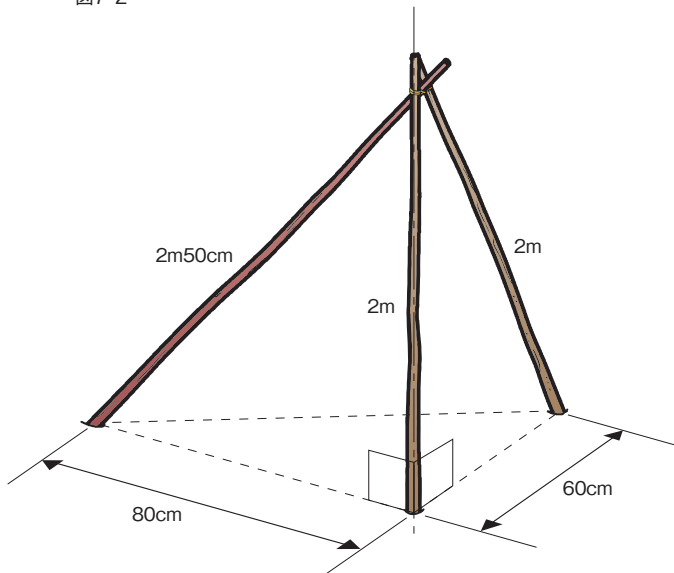


写真144



三脚上部

写真145

三脚を立てます。長い木材は南北に向け、短い2本の木材はまっすぐに立てます。三脚の間隔をおよそ60cmにします。(写真146)



写真146

三脚を4箇所を設置しました。南北、東西共におよそ幅4mです。北から見て東西にある木材の間隔は約2mです。南北を向いた長い木材が屋根になります。西に入口、東に窓がきます。

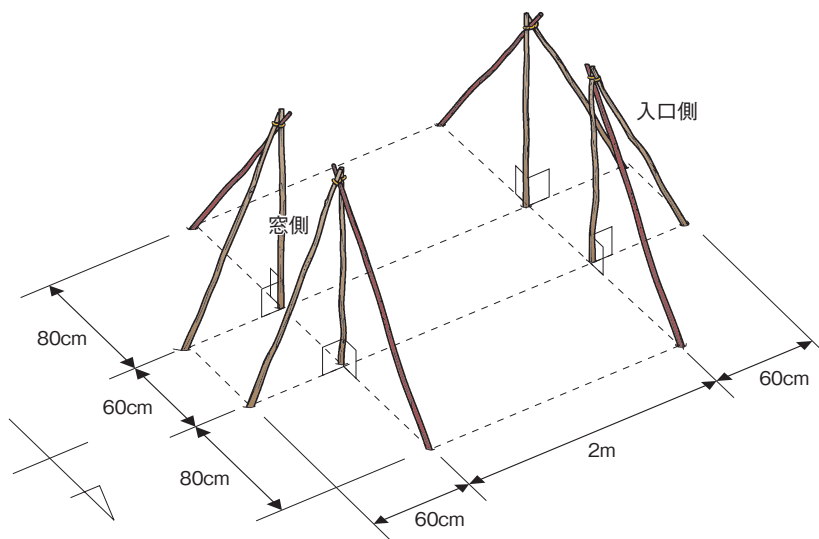
(写真147)



写真147

室内の面積は三脚の内側で東西約2m、南北4mになります。(図8)

図8



東西に置いたの三脚の上に、2m50cmの横木を渡します。

横木は南の入口側に根元を向け、窓側では先を向けて三脚に乗せます。北では横木の向きを逆にします。(写真148、149、図9)

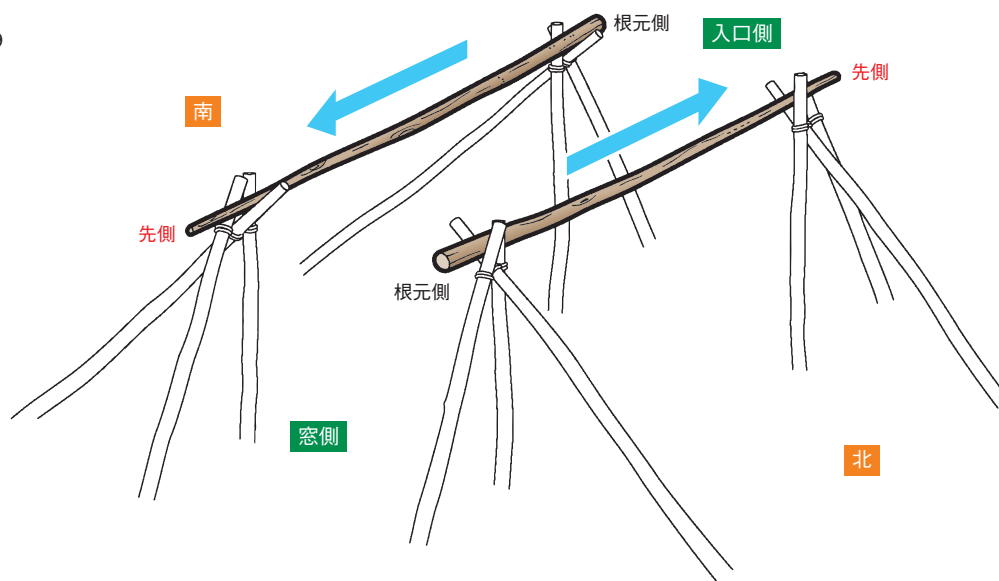


写真148



写真149

図9



旭川地域では、家の梁など横に渡す材料の向きが決まっており、根元側から先側に向かって反時計回りの流れをつくれます。

窓の枠をつくります。東の三脚に横木を取り付けます。2 m50cmの木材を使います。(写真150)



写真150

横木の向きは南に根元を向け、内側の木材の2本とシナの紐で結びます。窓ができました。(写真151)



写真151

北の屋根をつくります。2m50cmの横木を渡します。60cm間隔で3本つけます。(写真152)



写真152

横木の向きはそれぞれの面で同じにします。北の屋根は向かって左に横木の根元がきます。南も向きは逆にして同じように横木をつけます。(写真153)

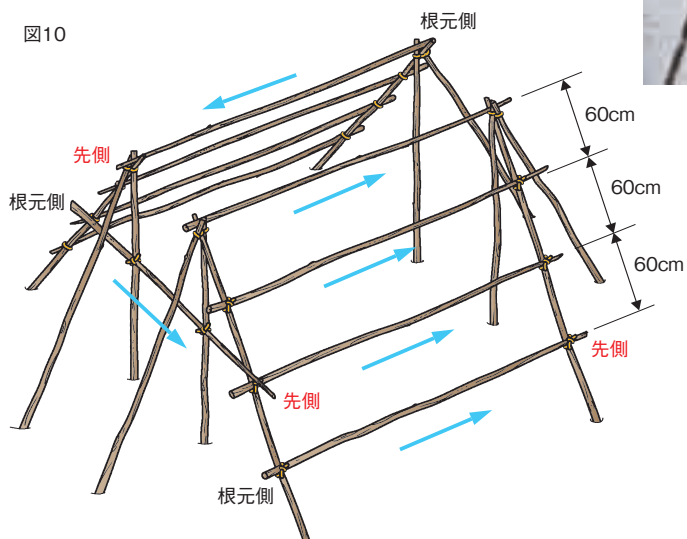


写真153

横木の間隔は挟めるほど松葉は乗せやすくなります。今回は60cmほど開けました。骨組みができました。(写真154)



写真154



松葉を屋根にかけていきます。松葉は表を内側に
向け、枝を上にして置いていきます。横木に松の枝
がかかるように乗せていきます。(写真155)



写真155

隙間のないように松葉を重ねながら、下から上へ
と順に葺いていきます。松葉は枝と葉がお互いに絡
むため、骨組みと結ぶ必要はありません。(写真156)



写真156

窓の下を覆います。先ほど取り付けした窓枠の横木
に松の枝をかけて留めます。窓の部分と中央の天井
は松葉を覆わずに開けておきます。(写真157)



写真157

炉をつくります。ハンノキを2本置きます。炉縁になると同時に、寝床との仕切りになります。ハンノキを置く向きは他の横木と同じです。炉の間隔は約60cmで入口、窓と同じ幅です。

(写真158、159)



写真158



写真159

炉の上は、煙の通り道になります。(写真160)



写真160

寝床をつくります。松葉は大きめの枝から表側を下に向けて敷いていきます。さらに大きい枝の上に松の枝を小さく折って乗せていきます。こうすることで、身体に硬い枝があたりません。

30cmほどの厚さまで松葉を敷き詰めます。

(写真161)



写真161

寝床が仕上がりました。寝床は両側とも入口から奥行きは2m、炉から屋根までの高さは約1m30cmあり、大人4人が寝ることができます。(写真162)



写真162

最後に入口側の壁を松葉で覆います。下から順に、松葉を置いていきます。(写真163、164)



写真163



写真164

上を覆う松葉は横木などに引っ掛けます。松葉は絡むので、横木に結ぶ必要はなく、ずれたり外れたりしません。(写真165、166)



写真165



写真166

完成

細かく折った松葉で隙間を埋めてクチャの完成です。壁も屋根も松葉で覆われています。入口は開いたままで、中央には炉があり、窓や屋根が開いているのが旭川地域の特徴です。

チセ（家）と同じように神窓は東向きにつくります。（写真167、168、169）



写真167



写真168



写真169

使い方

このクチャは4人用で、頭と足の向きをお互いに違えて寝ます。松葉を敷くことにより、直接地肌が雪に触れることはありません。薪があれば充分暖を取れます。

川上さんは山に入るときは山の神様に「山に入らせていただきます」と告げ、そして「カムイ（ヒグマ）が授かりますように」と祈ると言います。そして獲物がとれたときには感謝の気持ちを伝えます。（写真170、171）



写真170



写真171

何日間か滞在するようなヒグマ猟では丈夫な小屋が必要です。揉み小屋は、短時間で作り上げることができますが、数日間宿泊できます。

おわりに

クチャ（仮小屋）は、設置場所の選定から材料の調達、冬山での過ごし方など、自然のなかで暮らす知恵と知識に裏づけされた技術があったからこそ生まれたものなのです。

(写真172、173、174、175)



写真172



写真173



写真174



写真175

参 考 文 献

クチャに関する参考文献

- 鷹部屋福平
1939：「アイヌ屋根の研究と其構造原基體に就て」『北方文化研究報告』1
北海道帝國大學
- 鷹部屋福平
1943：『アイヌの住居』彰國社
- 北海道教育委員会編
1943：『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会
- 山本祐弘
1943：『樺太アイヌの住居』相模書房
1960：『樺太アイヌ・住居と民具』相模書房
- アイヌ文化保存対策協議会編
1969：『アイヌ民族誌』第一法規出版株式会社
- 萱野茂
1978：『アイヌの民具』すずさわ書店
- 財団法人平木浮世絵財団・リッカー美術館編
1980：『蝦夷風俗画展』財団法人平木浮世絵財団・リッカー美術館
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編
2000：『アイヌ民俗文化財調査報告書』アイヌ生活技術伝承実態調査Ⅰ
北海道教育委員会
- 小林孝二
2003：「絵画史料に描かれたアイヌの住居(チセ)について」『北海道開拓記念館研究報告』18
北海道開拓記念館
- 榎森進編
2004：『アイヌの歴史と文化』Ⅱ 「アイヌの歴史と文化」刊行促進協議会
- 佐藤孝雄編
2006：『シラッチセの民族考古学』六一書房
- 松浦武四郎
2008：『松浦武四郎選集』別巻 北海道出版企画センター
- 財団法人アイヌ無形文化伝承保存会編
『アイヌ文化伝承記録映画ビデオ大全集 シリーズ(5) アイヌ文化を伝承する人々
第2巻 ～イナウ・クチャ・イルパイェ～』財団法人アイヌ無形文化伝承保存会

アイヌ生活文化再現マニュアル
クチャ
【仮小屋】

2010年2月 発行

発行 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

〒060-0001

北海道札幌市中央区北1条西7丁目

プレスト1・7 (7階)

TEL.(011)271-4171/FAX(011)271-4181

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で禁止されていますので、あらかじめ財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構あてに許諾をお求めください。